

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：15201

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2011

課題番号：22720181

研究課題名（和文）中古語複合動詞の語構成の研究

研究課題名（英文） A Study of Word formation in old Japanese Compound Verbs

研究代表者

百留 康晴（HYAKUTOME YASUHARU）

島根大学・教育学部・准教授

研究者番号：50419983

研究成果の概要（和文）：本研究では複合動詞の通時論的研究における理論の構築を行い、中古複合動詞における語構成の特色を考察した。その結果、敬語動詞を始め「あそぶ」「弾く」「行ふ」など当時の貴族社会で身近な語彙の多用や「言う」「思ふ」「ののしる」「通ふ」など活動や働きかけのみを表し、対象物の変化を含意しない動詞が後項として生産性を持つということが中古複合動詞における特色として明らかになった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this paper is to make a methodology of the diachronic analysis of word formation in Japanese Compound Verbs, and to consider features of Word formation in old Japanese Compound Verbs.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|---------|---------|---------|---------|
| 2010 年度 | 200,000 | 60,000 | 260,000 |
| 2011 年度 | 200,000 | 60,000 | 260,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 400,000 | 120,000 | 520,000 |

研究分野：人文・社会

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：中古、複合動詞、語構成

1. 研究開始当初の背景

「見送る」「書き下す」のような「動詞＋動詞」複合動詞は近年以下の論考等を中心として、文法論的、意味論的側面から理論的考察が進んでいる。

影山太郎（1993）『文法と語形成』ひつじ書房

由本陽子（2005）『複合動詞・派生動詞

の意味と統語』ひつじ書房

松本曜（1998）「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114

しかし、複合動詞の語構成には意味論的制約が大きく、全ての語構成を完全に説明することはできていない。その要因として複合動詞の語構成における歴史的側面を無

視し、共時態における分析を中心としていることが考えられる。

ある共時態において観察される複合動詞は過去の特定共時態で作られ、引き続き使われているものが多くを占めている。したがって現代日本語における語構成を分析してもそこに統一的な規則性を見出し、その特徴を合理的に類型化することは難しいのではないかと考える。

そこで、複合動詞の語構成を歴史的な視点から整理し、その体系的把握や通時的変遷における原理の解明が求められるが、複合動詞の歴史的研究は特定の複合動詞の特定共時態における意味記述に終始している。

現代日本語の複合動詞研究において理論的考察が進んでいることに比べ、歴史的研究において関一雄(1977)『国語複合動詞の研究』笠間書院が今日でも依然としてその価値を保持していることは、その理論的深化の遅滞を物語るものである。

2. 研究の目的

本研究では複合動詞研究において遅れている通時論的複合動詞研究の理論について検討し、その構築を図ること、中古の複合動詞に特徴的な語構成を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

複合動詞における語構成の体系的把握やその通時的変遷における原理の解明の遅れの要因として、通時論的複合動詞研究における方法論が十分に確立されていない、個々の複合動詞の語彙体系における出入りが十分明らかにされていない、ということがある。

そこで、今後基礎となる方法論の理論的構築を進め、時代の移り変わりに伴う複合動詞の語彙体系における出入りを明らかに

していくことが必要である。その上で、特定の前項や後項を軸とし、各時代において生産的な複合動詞表現を割り出し、語構成における特徴を実証的に解明していくことを目指す。

本研究では複合動詞研究に関する先行研究の問題点を指摘し、通時論的研究の理論的構築を図る。その理論に基づき、中古における複合動詞を中世では使用されていないA群と中世でも引き続き使用されているB群とに分け、中古においては生産性が高いが、中世では生産性が低い複合動詞を明らかにし語構成の面から中古複合動詞の特色を明らかにする。

資料一覧

【中古】

『竹取物語』『伊勢物語』『平中物語』『落窪物語』『大和物語』『枕草子』『和泉式部日記』『源氏物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『堤中納言物語』『狭衣物語』『栄花物語』(以上日本古典文学大系)『土佐日記』『蜻蛉日記』『紫式部日記』『更級日記』(以上新日本古典文学大系)『宇津保物語』(『うつほ物語の総合研究1本文編』勉誠出版)

【中世】

『保元物語』『平治物語』『方丈記』『宇治拾遺物語』『徒然草』『曾我物語』『義経記』(以上日本古典文学大系)『平家物語』(新日本古典文学大系)『発心集』(『発心集本文・自立語索引』清文堂)『閑居友』(『閑居友本文及び総索引』笠間書院)『海道記』(『海道記総索引』明治書院)『東関紀行』(『東関紀行本文及び総索引』笠間書院)『十訓抄』(『十訓抄本文と索引』笠間書院)『十六夜日記』(『十六夜日記校本及び総索引』笠間書院)『とはずがたり』(『とはずがたり総索引(本文編)』笠間書院)『太平記』(『土井本太平

4. 研究成果

①通時論的複合動詞研究の構築について

通時論的複合動詞研究の構築を図る上で阪倉篤義(1966)『語構成の研究』角川書店の理論が有効である。阪倉は語構成論について「語構成論といふのは、つねに一つの特定共時態における問題として考へらるべきものであつて、われわれは、各共時態ごとの語構成様式についてそれぞれに考察をくはへる、といふことをもつて、語構成論的考察の基本の態度としなければならない。「その構造が、なほ言語主體の意識にいきてをり、その構造にのつとつて、あらたに造語することが、つねに言語主體の責任において可能でありうるやうな要素間の関係、それが、語構成論の中心をなす合成語の主要な問題となるのである」と述べている。しかし、その上で「まづそのやうな、各共時態における語構成法をあきらかにすることができたうへで、さらに、これを通時的に見ることによつて、そこに日本語における語構成様式の變遷を歴史的にたどることも可能になる道理である」とも述べている。ここに通時論的複合動詞研究の構築を図るための手がかりがある。

それでは「各共時態における語構成法」や「語構成様式の變遷」は何を分析すると解明できるのか。これまでは共時態における複合動詞の語構造全体を分析するという方法が採られていた。しかし、特定共時態の複合動詞全体の語構成を対象にすることは異なる時代、異なる位相で生まれた雑多なものをいっしょくたに分析することにならないだろうか。また変化せず使われ続ける基本語彙のような複合動詞に関して、その語構成がその時代の語構成を反映

していると言えるのだろうか。

そこで、この疑問に対する回答を得るために複合動詞における二面性を考慮したい。複合動詞は複合語であるため真つ先に語構成が問題とされるが、それ以前に語であり、語全体としては語彙論の対象となる。各共時態の語構成を明らかにするためには、各共時態の特徴を反映した語構成を見つけ出さなければならず、そのために語彙史論的な観点から考察対象を絞り込み、その語構成を考察するという方法がより有効ではないかと考える。

複合動詞を語彙史論的な視点から捉えるとその歴史的變遷の過程で複合動詞は以下の3つに分類される。

- A 使われ続けるもの
- B 使われなくなるもの
- C 新しく生まれるもの

Aには各時代をまたいで使われる語彙があり、B、Cにその共時態における特徴的な語彙が含まれていると考えられる。そこで、「各共時態における語構成法」の最たるものもB、Cの複合動詞に含まれていると考え、各共時態における複合動詞の特徴的な語構成を明らかにする上でAよりもB、Cを考察対象とし、その語構成を分析するという方法を採用したい。

②中古複合動詞における特徴的な語構成について

中古複合動詞は異なり数で7800程度収集できた。そのうちA群(中世では見いだせない複合動詞)は約7割、B群(中世でも見いだせる複合動詞)は約3割程度である。以下で前項動詞の生産性、後項動詞の生産性をもとに中古複合動詞の特徴について述べる。考察に当たり、異なり数20以上の複合動詞を生産する前項、後項について

のみ記述する。また A 群は平均して 7 割程度ある。そこで、A 群が 8 割以上ある平均以上の複合動詞群のみを記述する。例えば「急ぐ」という動詞は前項として 47 個の複合動詞を生産するがその全てが A 群である。また、「見ゆ」は前項として 34 個の複合動詞を生産するがその 91% に当たる 31 個が A 群である。このような複合動詞について対象とし、中古に特徴的な複合動詞について記述したい。

まず前項を中心とした複合動詞の生産性について述べる。異なり数 20 以上生産し、A 群の割合が 80% 以上あるものは以下の 20 である。

おもほし～・いそぎ～・つかうまつり～
～・聞こえさせ～・聞こえ～・おはし～
～・選り～・おぼし～・見え～・突き～
～・のたまひ～・うけたまはり～・おはしまし～
～・あそび～・うらみ～・弾き～
～・乱れ～・おこなひ～・降り～
しのび～

これらを見て目に付くのは敬語形の多さである。おもほし～・つかうまつり～・聞こえさせ～・聞こえ～・おはし～・おぼし～・のたまひ～・うけたまはり～・おはしまし～がそれに当たる。これは中古における敬語の発達を反映して生産され、それが複合動詞の語構成に現われたものである。しかし、これらの表現は中世では使われておらず、このような要素を前項とする複合動詞の生産性は低下した。

また、特殊な貴族社会での生活や慣習などを反映した「あそぶ」「弾く」「おこなふ」という「楽器の演奏」「仏道修行」を表す動詞や「恨む」「忍ぶ」「急ぐ」といった心理動詞が形成する複合動詞が生産的になっていることが、他の時代とは異なる中古複合動詞の特徴として考えられる。これらの動

詞は特に当時の貴族社会における生活の中で重要な行為を表しており、より表現性の広がり希求されたのであろう。前項から見た複合動詞の生産性にはその時代の生活における特徴的な語彙が色濃く反映されていることが窺える。

次に後項を中心とした複合動詞の生産性について述べる。異なり数 20 以上生産し、A 群の割合が 80% 以上あるものは以下の 14 である。

～増す・～添ふ（下二）・～物す・～いふ・～まさる・～ならふ・～思ふ・～ののしる・～過ぐす・～まどふ・～始む・～通ふ・～初む（下二）

これらの中で注目されるのは「増す」「まさる」という「量の増減」を表す動詞が後項となる複合動詞が比較的生産的であるということである。「増す」は中古で 25 個の複合動詞を生産し、そのうち中世でも使用が認められるものは 0、「まさる」は 76 個の複合動詞を生産し、そのうち中世でも使用が認められるものは 10 である。いずれも中古でのみ目立って生産的であると言える。このような複合動詞が他の時代と異なり、中古では生産的であったことの背景に感覚で捉えたことの素朴な言語化があったのではないかと考える。つまりこれらで言えば視覚によって捉え、判断したことを話し手は素朴に言語化してしまうということである。現代でも視覚は他の感覚よりも有意であるとされているが、複合動詞の語構成において物事に関する判断をあらわす動詞が後項となることはあまりない。このことは中古の複合動詞の語構成として注目すべきだろう。

また。「言う」「思ふ」「ののしる」「通ふ」など活動や働きかけのみを表し、対象物の変化を含意しない動詞が後項として生産性

を持つということも中古複合動詞における特色として指摘できる。現代日本語ではこのような動詞が後項として複合動詞を構成することは少ない。また、「初む」「始む」という開始の局面を表す後項の生産性が中世以降下がるのは意外である。

本研究では中古複合動詞における語構成を解明するため、中古にのみ特徴的に表れる語構成を中心に考察した。その結果、中世や現代とは異なる、中古の語構成における特色を明らかにできたと考える。本研究で見えた語構成上の特色が中古複合動詞の語構成全体とどのように関係しているか、についてさらに検討することを今後の課題としていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 百留康晴, 上代中古における「～見る」, 国語教育論叢, 査読無, 第21号, 2012, 157-167
- ② 百留康晴, 中古和文における「見え～」について, 国語教育論叢, 査読無, 第20号, 2011, 29-39
<http://sir.lib.shimane-u.ac.jp/metadb/up/bull.pl?id=7246>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

百留 康晴 (HYAKUTOME YASUHARU)
島根大学・教育学部・准教授
研究者番号：50419983

(2) 研究分担者
()

研究者番号：

(3) 連携研究者
()

研究者番号：